

ChatGPTがもたらした激震と人間の創造性



JICQA
代表取締役社長
菅野 良一

チェスや将棋で世界を驚かせたAI（人工知能）が知られて久しくなります。最近のDX（デジタルトランスフォーメーション）の動きと共に、機械学習や深層学習（ディープラーニング）といった言葉に触れる機会が多くなりました。このような中で、米オープンAIが公開した自然言語生成AI「Chat（チャット）GPT」の出現は世界に激震をもたらしました。私も含めた多くの人たちにとっては、「こんなことも回答してくれる、まともな日本語だ」といった理解の域を出ないと思いますが、専門家の間では、ChatGPTは日常的な仕事の相当な部分を担うことができる、多くの仕事に大きな影響を与えると見られています。直近の研究では、会計士、通訳、物書き、プログラマー、法律家の仕事は失われる可能性があるとの指摘もあります。

私は以前から、人間の本质・やる気、それを司る脳科学や認知科学に興味を持ち、関連する本や記事などを読みあさっていました。最近納得した本の一つに、ニック・チェイター著『心はこうして創られる「即興する脳」の心理学』（講談社）があります。原著は2018年、日本語訳は2022年に出版された比較的新しい認知科学の本です。その本の中に、「人間の脳はエネルギー消費量20ワットという慎ましき、現行のコンピュータとは極めて異なった原理に基づく…（中略）…人間の推論や知識をコンピュータ・データベースにする試みは完全に失敗した」とありました。デジタルカメラより圧倒的に解像度が低い人間の目（約100万画素）から得る視覚情報を脳内で処理する能力、右脳と左脳の共同作業により感情と論理を瞬時にコントロールする能力、いずれもコンピュータには到底真似できないはずという私の信念をこの本は一層強固にしてくれました。周りの人たちに対して「AIは……」といったうん蓄を傾けていた訳です。

私の信念の旗色が悪くなったのはChatGPTの出現と多くのユーザーからの情報です。ChatGPTは2017年に発表

された「Transformer」という革新的な深層学習モデルをベースに進化させた対話型AIです。数年前の出来事ですので、チェイター教授もその革新性に気付いていなかったのかもしれませんが。AI研究の第一人者である東大の松尾豊教授によれば、ChatGPTのプログラムでは、人間の創造性に関連するパターンの類型化とその組み合わせが起きている、心の理論のようなものまで学習されているとのこと。ニューラルネットワーク、ビッグデータ、深層学習での自己学習能力、そしてコンピュータの能力の飛躍的拡大が、いま正にプログラムが子供から徐々に成長するような振る舞いをしているようです。AI研究者でもChatGPTの中で何が起きているのかわからない、何らかの推論もしていて、ある種の「創造性」というポテンシャルも持っているとの評もあります。ただし、「創造性」と言っても本当の人間の創造性とは別のようです。

では人間しかできないことは何でしょうか。松尾教授は「目的を考えること」と指摘しています。目的を考えることは、なぜを問い、何をするかを定めるプロセスであり、そのスタートは意味を考えることから始まります。山登りにたとえば、山に関する情報はChatGPTが提供してくれますが、なぜ山に登るのか、どの山に登るのかは人間が決めることとなります。数学者であり作家である藤原正彦教授は、「論理はA→B→C→D……と進むが、その始まりのAは仮説であり、その出どころは人間が持つゆらぎを伴う情緒である」と論じています。始点となる目的や仮説を設定する力、ゼロから何かを生み出す力、革新につながるポテンシャルを励起する力、それらの端緒となる情緒といったキーワードが人間の創造性の基本になるものと考えられます。

JICQAの審査業務も近い将来AIの影響を受けるはずですが、当然のことですがAIに使われることなく、AIを効果的に最大限活用し続けること、その上でよりレベルの高い審査を通じてお客様とともに課題を特定し、お客様での効果的なPDCAサイクルに貢献することが大切です。その際最も重要となる点は、現地審査での人対人の対面型でのコミュニケーションです。表情や感情を感じ取りながら相互に得心するまで対話・議論を続け、目的・目標・仕組みを素早く見直し、そして強い意志を持って改善していく作業です。JICQAは激変する環境下においても企業の皆様の改善と成長に貢献するサービスを提供し続けて参ります。